Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞韓小忙『西夏文詞典（世俗文献部分）』
Author(s)	荒川, 慎太郎
Citation	内陸アジア言語の研究. 2022, 37, p. 135-142
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91333
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

内陸アジア言語の研究 37, 2022.11, 135–142

＝書 評＝

韓小忙『西夏文詞典（世俗文献部分）』

荒 川 慎 太 郎*

0. はじめに

2021 年 8 月，中国社会科学出版社から，西夏語に関する大型辞典『西夏文詞典』（世俗文献部分）が刊行された．西夏文字・西夏語辞典として現時点で最大の収録語彙を有するこの辞典を包括的に論じることは困難で，西夏語仏教文献から言語学的研究を行う評者は，史学・文化史的な見地からの評は他に譲り，言語学的・文字学的見地から，本辞典を論じることとする(1).

1. 本書の成り立ちと構成

本書は陝西師範大学歴史文化学院教授，韓小忙博士の，博士論文「西夏文正字研究」がもとになった辞典である．博士は西夏文字，西夏語音韻学にも精通し，『同音文海宝韻合編』（韓 2008），『同音背隠音義』（韓 2011）など多くの論著を有する．西夏文字の微細な差異を観察し，分析した，重要な学術論考は，専門家に限らず広く周知されるところである(2).

本辞典は，現在でも国際的なスタンダードとなっている李範文の編著『夏漢字典』（李 1997，増補修正本 2008，簡明版 2013）から，クチャーノフによる辞典（Кычанов 2006），賈常業による字典（賈 2013，2019）など(3)を経て，語彙の説明・収録数などで格段に増補された，現時点で最大の西夏語「辞典」と位置付けることができる．韓も賈も李の学統でありつつ，ポスト『夏漢字典』とでもいうべき，学問的な進展が確認できる．

---

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授（ARAKAWA Shintaro. Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies）

(1) 評者は通常拙稿において，西夏語の推定音表記に荒川 2014 を用いるが，本稿では書評対象の辞典，『夏漢字典』に用いられる龔煌城（Gong Hwang-cherng）の表記で統一する．ただし中国においても声調の表記（1=平声. 2=上声）は一定しない（『夏漢字典』は表記無し．本辞典では音節末．劉 2022 などでは音節初頭など）．基本的に音節末で統一した．本書評では今昔文字鏡西夏文字フォントを使用する．

(2) 韓小忙博士の経歴，業績は以下の URL なども参照されたい．
http://his.snnu.edu.cn/info/1067/8247.htm
http://xixia.snnu.edu.cn/info/1016/1013.htm

(3) 本書評で言及する既存辞典類の略称は次のとおりとする．『夏漢』（＝『夏漢字典』，本稿で参照するのは李 2008），K 辞典（＝クチャーノフによる『西夏語辞典』，Кычанов 2006），「夏漢対照語彙」（＝西田龍雄による仏典中の「西夏語・漢語対照語彙集」，西田 1977: 63–254）．

本書は「世俗文献部分」とあるように，西夏語文献において大部を占める，仏典を含む宗教文献ではなく，中国古典の西夏語訳，法律文書，韻書，詩歌，碑文などを出典とする．ただしこれは資料数が少なく，辞典に不足があるというわけでは全くない．むしろ，対訳資料の無い法律文書，詩歌，あるいは断片化して文脈の理解が難しい碑文類をソースとすることは，仏典をそれとする以上に困難な点がある．加えて本辞典では，判読の困難な崩し字によるものを含む，多くの写本も収録対象とされている．こうした扱いの難しい資料が利用されている点をまず高く評価したい．

さて，本書は本編 8 巻，索引を主とする附録巻 1 巻から成り立つ．ちなみに各巻は，「左偏旁索引」見出し部首の「画数」によってまとめられる．1 巻「1,2 画」，2 巻「3 画」，3 巻「4 画（上)」，4 巻「4 画（下)」，5 巻「5 画（上)」，6 巻「5 画（下)」，7 巻「6 画」，8 巻「7 画以上」，という構成となる．

最終巻 9 巻の構成は次のようになる（：から右は評者による説明).

索引 1. 西夏文左偏旁索引：冠・垂・偏（繞)・構から検索する索引

索引 2. 西夏文右偏旁索引：脚・旁から検索する索引

索引 3. 西夏文筆画索引：総画数から検索する索引

索引 4. 西夏文四角号碼索引：「四角号碼」により検索する索引

索引 5. 西夏文音統索引：声母（初頭子音）から検索する索引

索引 6. 西夏文韻統索引：声調（平声・上声）に分け，韻母（韻書配列）から検索する索引

附録 1. 西夏語声韻表：１）声母と２）韻母の分類表と辞典における推定音表記

附録 2. 西夏世系表：皇帝と在位年

附録 3. 西夏紀年表：景宗元昊から末帝睍までの年号と西暦との対応

附録 4. 西夏文中的異体字：異体字とその特徴など

附録 5. 西夏文世俗文献解題：出典となった西夏文一次資料の解題

2. 辞典項目の特徴と意義

西夏語・西夏史研究者には既知の情報ではあるものの，この言語・文字に関する基本にして，特徴的な事項を述べておかねばなるまい．西夏語はチベット・ビルマ語派に属する言語の一つであり，現在はギャロン系言語の下位分類に含まれるとする見方が一般的である．こうした言語は現在の四川省西部などに点在する．本来の西夏党項族故地も四川省・青海省である．彼らの北方への遷移により，距離的には近いチベット語より，「方向接頭辞」「人称接尾辞」など，いわゆる「川西走廊言語」と西夏語には共通する特徴が多い．

西夏文字は，西夏の学者が数年の準備期間を経て創製し，1038 年に皇帝の命によって公布された．西夏では漢語音韻学に倣った音節分析，韻書・韻図の作成が盛んだった．漢語訳すると『同音』『文海』『五音切韻』などと称される資料が現存する．どの資料でも「声母（初頭子音)」「韻母（声母を除いた音節の残りの部分」という分析法が共通する．詳しい説明は省略するが，『同音』は声母を大きく調音位置で九分類し，「同一音節の文字をグループ化」した発音字典である．『文海』は

漢語の切韻系韻書に倣ったもので，平声・上声の主要２声調で全韻母を二分した後，西夏学者の定めた韻母番号と配列順に従って，平声 97 種の韻母，上声 86 種の韻母ごとに，音節を整理したものである．『五音切韻』は，声母と韻母の可能な組み合わせを示した，一種の音節表である．

さて，本書の特筆すべき点は，後述するように「語彙のレベル」での収録数の多さであり，多様な例文を時に長文でも採用，例示していることである．それに加え，個々の文字の基本説明部分にも，従来以上の情報が，高い精度で記載されている．下に韓 1: 2l[(4)]の「矝」字の項目を例示しつつ説明したい（西夏文字見出しの右隣の諸情報には，説明のため，便宜的に丸数字を付している）．

①『同音』の声母分類番号と同一音節の文字群の整理番号：VII14 は「第七品正歯音類　14 番目のグループ」

②『文海』の韻母番号：1.21 は「平声第 21 韻」

③龔煌城（Gong Hwang-cherng）による推定音：本例の tśhjaa は，声母 tśh＋韻母 jaa による

④漢字による類似音：本例の「召」は直接的な漢字対音例がある

⑤左部索引見出し/右部索引見出し：「左」とあるが，本例の場合は「冠」

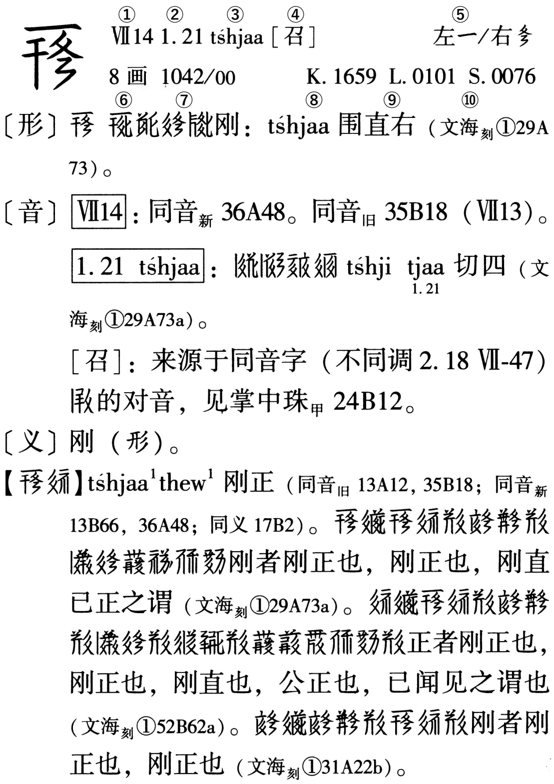
⑥総画数

⑦四角号碼番号

⑧ K ＝ K 辞典の文字番号

⑨ L ＝『夏漢』の文字番号

⑩ S ＝ Софронов 1968 の文字番号


矝 ① Ⅶ14 ② 1. 21 ③ tśhjaa ④［召］ ⑤ 左一/右⺕
⑥ 8 画 ⑦ 1042/00 ⑧ K. 1659 ⑨ L. 0101 ⑩ S. 0076
〔形〕矝 …：tśhjaa 围直右（文海刻①29A73）。
〔音〕Ⅶ14：同音新 36A48。同音旧 35B18（Ⅶ13）。
1. 21 tśhjaa：… tśhji tjaa(1. 21) 切四（文海刻①29A73a）。
［召］：来源于同音字（不同调 2. 18 Ⅶ-47）… 的对音，见掌中珠甲 24B12。
〔义〕刚（形）。
【矝…】tśhjaa[1]thew[1] 刚正（同音旧 13A12, 35B18；同音新 13B66, 36A48；同义 17B2）。… 刚者刚正也，刚正也，刚直已正之谓（文海刻①29A73a）。… 正者刚正也，刚正也，刚直也，公正也，已闻见之谓也（文海刻①52B62a）。… 刚者刚正也，刚正也（文海刻①31A22b）。

続いて〔形〕〔音〕〔義〕という，漢字學における古典的な三分類で個々の文字解説が挙げられる．その後，当該の文字を含む複数音節語が確認される場合には，熟語が例文とともに挙げられる（当該の文字が人名（番姓など）に確認される場合は，〔音〕の後に）．

〔形〕は『文海』における字形説明部分，原文とその解釈が記載される．実は『文海』の字形解説は平声部しか現存しない[(5)]ため，上声韻字の場合，この項目は記載されない．

〔音〕は，韻書『同音』『文海』の情報がさらに詳しく掲載される．『同音』の声母分類番号と同

(4) 評者は本稿において，本辞典の西夏文字例，説明箇所，例文を「巻数：頁数，左段(l)/右段(r)」で示す．「韓 1: 2l」は「第 1 巻，2 頁，左段」を表わす．

(5) 厳密にいえば『文海雑類』として知られる『文海』の補遺部には上声韻字も残り，そこには字形解説される字が若干存在する．

一音節の文字群の整理番号に続いて『同音』新版・旧版の文字記載箇所が示される．「36A48」であれば「36 葉目右頁，4 行目上から 8 文字目」を指す．この情報は『夏漢』でも掲載されたものの，『同音』旧版におけるもののみ，しかも「36A4」のように「何行目」は示されるものの「何文字目か」の記載が無かった．評者のように西夏文字研究上，『同音』原文の西夏文字にアクセスしたい場合，これらの情報がたいへん有益であることは言うまでもない．

〔義〕は，複数の語義がある場合は一，二…のように分けて，時に名詞・形容詞・動詞などの品詞分類とともに示される．

当該の文字を含む複数音節語が確認される場合には，熟語が【　】内（さらなる派生語は〖　〗内）に示され，出典が文レベルで示される．熟語は 𗍫（韓 1: 478r–496r）のように実に 132 例に及ぶものもあり，また長文の例文が惜しみなく挙がるため，研究者に有益である．(6)

熟語の中には𗤶𗥞「盈能」（韓 3: 398r）(7)，𗼇𗽅𗢳「作坊司」（韓 8: 220r）のように，西夏法律文書『天盛旧改新定禁令』中に確認できた職名ながら『夏漢』に未収録のものもあり，世俗文献の読解に今後も有益なものとなろう．一方で，資料を「世俗文献に限る」としているものの，𗥤𗍊「三宝」（韓 8: 1011），𗏁𗣼「正覚」（韓 4: 77r）(8)といった，『夏漢』に挙がらない仏教語も収録しており，評者も参考にできる記述が非常に多い．

3. 各種索引の紹介

おそらく，大多数の使用者が用いるのは「索引 1. 西夏文左偏旁索引」，つまり「冠・垂・偏（繞）・構」から検索する索引であろう．漢和辞典索引に馴染みの深い読者には見当がつくとは思うものの，検索順を述べると，

① 9 巻 3–7 頁の「部首目録」から，見出し字の部首を見つける

※部首は画数→ 1 画目の筆画分類順(9)

②部首も含む総画数の分類（9 巻 8–94 頁）を見る．1 画目の筆画分類順で見つける．

例）𗏁

部首は 4 画 LR70（⑨39）→LR70（9 巻 39 頁以降）総画数 10 画→41 頁 6 文字目→「④160」

これで「4 巻 160 頁」にアクセスすると，当該の文字が見出しに見つかる．

これに，「索引 2. 西夏文右偏旁索引」という，漢字の「脚・旁」に相当する部品からの索引が続

---

(6) 例えば，𗍫𗍫𗍫『甲乙経』であれば，𗍫（韓 3: 93r），𗍫（韓 5: 402r），𗍫（韓 5: 304r）の 3 字の項目に熟語として挙がる．ただしこのような場合，説明・例文は全て同一のものであり，いたずらに頁数を増大させる結果となっている．やや編集方針に疑問を覚える．

(7) K 辞典では，この 2 音節語が「文法語（grammatical word）」とされる（項目 2455-1）ものの，例文は挙げられない．本辞典の例文などから確認するとやはり官職名とするのが妥当だろう．

(8) K 辞典では項目 2527-4，3855-15 に「正覚」，「夏漢対照語彙」（西田 1977: 184）では「成正覚」で掲載される．

(9) 1 画目の筆画分類：横棒→縦棒→右上から左下への払い→点（短い縦棒・左上から右下への短い払い）→折れ（横棒右端を下に伸ばす，など）

く．上と同じ文字 [illegible] を例にとれば，

部首は 6 画 RR272（⑨175）→RR272（9 巻 175 頁以降）総画数 10 画→175 頁 1 文字目→「④160」

上と同様に「4 巻 160 頁」にアクセスすると，当該の文字が見出しに見つかる．このような「旁から調べる配列」は，部首引きの漢和辞典に慣れた我々には馴染みが無いものの，「資料が断片化するなどして，文字の一部しか判読できない場合」「西夏文字の研究のため，特に同じ旁の字形を網羅的に調査したい場合」など，非常に有用である(10).

続く「索引 3. 西夏文筆画索引」は，7〜19 画の文字が極めて多い西夏文字の検索にそれほど便利とは言い難いものの，初画を「一（横棒）→丨（縦棒）→ノ（払い）→丶（点）→フ（折れ）」の順に大分類し配列するなど，それなりに工夫が凝らされている．

「索引 4. 西夏文四角号碼索引」は，漢字系文字の特徴である「方塊性（四角のマスを隅々まで埋めるように文字が創製されること）」を活かした，中国式の漢字字典で馴染みの深い索引である．

「索引 5. 西夏文音統索引」は声母で音節を分類し，文字を『同音』掲載順に並べた索引．西夏語音韻学の，主に調音位置による分類，例えば「重唇音（両唇音）」などで大別し，その現代音声学的な文類と配列（p-, ph-, b-, m-）で初頭子音として整理，そののち，西夏語韻書『同音』掲載順に文字を配列したものである．率直に言って，評者のように，西夏語音韻学や『同音』の文字配列に関心のある研究者しか利用する機会はないものと考える．

「索引 6. 西夏文韻統索引」は，声調で音節を二分し，西夏語音韻学が定めた韻母（番号順）で音節を分類し，文字を『文海』掲載順に並べた索引．これも「索引」というものの，西夏語音韻学を専門とする者以外は使用の機会は無いだろう．

索引 1, 2 は数々の工夫が凝らされており，文献中の西夏文字を調べるのみならず，西夏文字の体系的な調査にも有用なものである．今後これを活用した西夏文字学の進展が期待される．

4. 西夏語学から見た問題と今後の研究

以下，本辞典を実際に利用して気になった点を列記する．

まず，本書評を執筆して痛感したが，本辞典自体の西夏文字コード，通し番号のようなものが示されないため，個々の文字を指定し，西夏文字を用いずに第三者に伝えるのが困難である．今後オンラインなどで「西夏文字・韓小忙コード番号」のようなものの公開が望まれる．

本辞典には『夏漢』の見出しのような英語語義が無い．本辞典が既存の字典類以上の語義を載せており，また西夏語の語義を簡潔な英語で示すことは非常に難しいことは承知するものの，記載が

(10) K 辞典の索引は「右端の要素から左端の方に遡るように」文字を検索する．これは本辞典の索引 2 とは，似て非なる検索法で，見出し要素は共通するものの，それ以降の検索は「画数」ではなく「字形」で文字を探していく．どちらの検索法も一長一短あるが，文字の派生関係を調査する場合は K 辞典の検索が有効な場合が多い．例えば，𗤶「集」，その派生字である𗤶「集」，𗤶「散」，𗤶「巻」，𗤶「攪拌」，が見出し字番号 0154〜0158 と連続する（Кычанов 2006: 12）ため，文字の派生関係が一目瞭然である．一方本辞典では，これらの文字の見出しは「丨（縦棒）」であり，それを除く筆画数がみな異なるため，隔たった別々の場所に配置されてしまう．

望まれよう．また，現在までの研究の蓄積という点でいえば，チベット文字による対音例が無いのが点睛を欠くと言えようか．仏典陀羅尼などのサンスクリット対音については，今後の「宗教文献編」の課題となろう．これらは見出しに示すより〔音〕の部分で提示するのが適切かもしれない．

本辞典は『漢語大詞典』などに見られるスタイルで，語義別・熟語別の説明と例文が掲載されている．例文の収録範囲が多く，出典箇所が詳しく明示されるなどたいへん充実しているものの，やや長文も含まれる．見出し字や熟語が例文のどこにあるのか，またその要素の対応漢語がどこなのか（もちろん西夏語と漢語が一対一で対応するとは限らないが）分かりにくい．せめて前者には下線などがあればと感じた．

近年，評者は西夏文字の「字形」について再考している（荒川 2018，荒川 2020a，荒川 2020b など）．先行研究，既存の字典・フォントには字形・筆画を見直す必要があるものが少なくないと考えている．西夏文字に「異音同字」，つまり「同じ形でありながら異なる音（そのため，韻書類には別々の位置に記載される）を持つ字」があると，最新の概説書（聶 2021: 76–80）でも論じられている．本辞典でも同じ見地から，「異音同字」を A, B と区別し整理している（例えば 𗍊Ⓐ2.11 mee「燕」と 𗍊Ⓑ1.27ŋwə「天」，ともに韓 8: 9r）．拙稿中（荒川 2022: 93）で示したように，原文を子細に見れば，全くの「同字」ではなく，本辞典での整理にも疑問を覚えるものの，もちろん今後の検討課題であると承知している．

最後に指摘しておきたい点として，言語学的な視点から見れば，文法語の説明が不十分に見受けられる箇所がある．例えば，西夏語研究者の間では周知の，一連の「接頭辞 1，2」(11)の語義・説明である．実は「接頭辞 1」の示す（あるいはかつて示していた）とされる「方向」についても，研究者間で完全な一致をみるものではない．それでも次の組み合わせに関しては，多くの研究者の意見が一致している．

方向	接頭辞 1	接頭辞 2
「上の方へ」	𗏁	𗍫
「下の方へ」	𗍮	𗍯

本辞典では，𗏁は「上向きの方向を示す」ことが明示される（韓 1: 479l）ものの，𗍮については動作の方向に関しては記述されない(12)．その結果，𗍮の項目 6（韓 3: 603l 六）では「うまく訳出できない」とされる例が出てしまう．しかし「下方向への動作」で以下のような例文は解釈できるのではないか(13)．

(11) これらの接頭辞に関して，評者の最新の見解は Arakawa 2022 参照．

(12) 一方，『夏漢』では，記述は短いものの，言語学的に明瞭に語義が示される．字義②「方向接頭辞，下方へ向かうものを表わす；完了態の接頭辞」（評者訳．李 2008: 242r）．

(13) 一般的に「必定（必ず）」を表わす𗍮𗅋に対し，接頭辞が当該の要素となる𗍮𗅋も存在する．韓 3: 603l 六の最後の例文は，一文中に両者が見いだせる興味深い例である．評者にもこの接頭辞の使い分けは不明である．

𗤶𗥤𗍊𗥓　元常は（下方向に）書き記した[14]（韓 3: 603l，例文１）
𗢭𗅋𗏵𗍊𗏵　禹は九河を（下方向に）解き放った（韓 3: 603l，例文２）

本辞典の例文には，上述のような「大多数情況不訳出」とされつつも，例文と訳文を提示している項目が多い．これらを示すことは，研究者にとって，出来るようでなかなかできない，非常に真摯な姿勢として高く評価できる．こうした「機能不明の語彙」「例外的な言語現象」は，西夏語の研究を志す後進に，多くのテーマを与えることになるだろう．

本辞典で「機能不明」とされる語彙が，最新の研究で解釈される例を示したい．劉 2022 では，従来「接頭辞２」とされた要素 𗢭·jij[1] が特定の動詞（𗣼 dźjiij[1]「住する」）に前置される場合，「願望・希求」を表わすことは全くなく，「継続」を示すということを主張している．

韓 3: 399l–r では西夏文字 𗢭 の説明，第７項目に「助詞とするものの，大多数の状況は訳出できない」とされる，３つの例文と訳文が挙がる．その２例までが，劉の指摘する𗢭·jij[1]＋𗣼 dźjiij[1] であり，「住んでいた」のように，一定の期間行為が継続していたという解釈をすれば，文意が通るのである．一つ目の『類林』の一部を示そう．韓は中国語，劉は日本語で訳出しており，微妙な差異を示すのは難しいが，当該の要素と訳文の対応を２種類の下線で示したい．

𗍫𗍬𗍭𗍫𗍮𗢭𗅋𗍬𗢭𗣼
韓：蘇武在匈奴十九年，＜後略＞（韓 3: 399r）
劉：蘇武は匈奴に十九年住んでいた．＜後略＞（劉 2022: 65）

上記の例は「十九年」という，「明らかな期間の，動作の継続」が明瞭に示されており，劉の推測を裏付けるものである[15]．

もちろん本辞典において，西夏語学の成果が反映されていないというわけでは全くない．例えば，動詞「覚る」については，「主語が第 3 人称である場合，動詞は𗍊 2.33 tsjij（基本形）を用い，主語が 1, 2 人称である場合，動詞は𗍊 2.10 tsji（派生形）を用いる」（韓 4: 362l）のように，人称による動詞語幹の屈折と派生字の説明が行われる例も指摘しておく．

充実した本辞典の内容からすれば，些事を指摘したが，もちろん本書の価値を貶めるものでは全くない．今後一層多くの用例が見込まれる，非「世俗文献」，つまり仏典[16]を始めとした宗教文献編が編纂・公刊されることを期待する．おそらくは電子媒体になり，検索も一層スマートなものとなることであろう．

---

(14) この接頭辞＋動詞語幹の連続「書き記した」は，仏典『金剛経典纂』などでも確認できる（荒川 2014: テキスト編 418）．

(15) 韓 3: 603l 六の例文二つ目も，「継続」という解釈で文意が通ることが劉によって指摘されている（劉 2022: 65）．

(16) 前言（韓 1: I）によれば，例えば西夏文『大般若波羅蜜多経』の残存 450 巻の入力などは完了しているそうである．

参考文献

荒川慎太郎 2014『西夏文金剛経の研究』，京都：松香堂.

____2018「西夏文字における，いくつかの左下要素の筆画について」『日本言語学会第 157 回大会予稿集』，京都：日本言語学会，pp. 442–447.

____2020a「西夏文字の，ある「５画」部首の再分類」『日本言語学会第 160 回大会予稿集』，京都：日本言語学会，pp. 14–20.

____2020b「西夏文字における「点」の出現環境と機能」『日本言語学会第 161 回大会予稿集』，京都：日本言語学会，pp. 120–126.

____2022「西夏文字の「部首」と造字法」『漢字系文字の世界―字体と造字法』，東京：花鳥社，pp. 90–108.

韓小忙 2008『《同音文海宝韻合編》整理与研究』，北京：中国社会科学出版社.

____2011『《同音背隠音義》整理与研究』，北京：中国社会科学出版社.

____2016『西夏文的造字模式』（西夏文字与文献研究），北京：中国社会科学出版社.

賈常業 2013『新編西夏文字典』，蘭州：甘粛文化出版社.

____2019『西夏文字典』，蘭州：甘粛文化出版社.

李範文編著 1997『夏漢字典』，北京：中国社会科学出版社 (増補修正本 2008，簡明版 2013) .

林英津 1994『夏訳《孫子兵法》研究』上下(中央研究院歴史語言研究所単巻之二十八)，台北：中央研究院歴史語言研究所.

劉少華 2022「西夏語の「1·jij」＋「1dźjiij」における前部要素の機能について」『語学研究所論集』26，pp. 59–67.

西田龍雄 1977「西夏語・漢語対照語彙」『西夏文華厳経』III，京都：京都大学文学部.

聶鴻音 2021『西夏文字和語言研究導論』，上海：上海古籍出版社.

Arakawa Shintaro 2022 “Directional prefixes in Tangut: Outline, types, and some remarks,” Arakawa Shintaro and Ikeda Takumi (eds.) *Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 3: Function of Directional Prefixes*, Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University, pp. 15–54.

Кепинг, К. Б. (Kepping, K. B.) 1979 *Сунь цзы в тангутском переводе*. Москва: Наука.

Кычанов, Е. И. (составитель), Аракава С. (со-составитель) 2006 *Словарь тангутского (Си Ся) языка: Тангутско-русско-англо-китайский словарь*, Kyoto: Faculty of Letters, Kyoto University.

Софронов, М. В. (Sofronov, M. V.) 1968 *Грамматика тангутского языка*. В 2 кн. Москва: Наука.

付記　本書評は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築(2)－文字学に関する既存術語の再検討」の成果の一部である.